

特集

そのとき、あなたならどうする？ ～さまざまな視点から防災を考える～

「阪神・淡路大震災」平成7（1995）年、「新潟県中越地震」平成16（2004）年、そして「東日本大震災」平成23（2011）年など過去の大震災の教訓から、男女のニーズの違い、多様な生活者の視点に配慮した対策、取組みの重要性が指摘されました。

今回の特集では、災害が起きた直後から、時間の経過とともに起こりうる問題や状況、解決の糸口、課題などを、男女共同参画・多様性配慮の視点で考えてみました。（筑紫）

防災になぜ、男女共同参画が必要なのでしょう。

どんなときにも生きていくために必要なことがある

災害時には様々な困難な状況がおこります。当たり前のことですが、水、トイレ、安全に過ごし眠れる場所、食べ物など災害直後から生きていくために必要なこと＝「ニーズ」があります。そして、そのニーズは人間ならだれでも必要なものである一方、様々な立場で内容や支援の方法に違いがあるのです。

災害時に特に配慮が必要な人々がいます

災害時に特別な配慮や支援が必要な人々がいます。普段はそれほど苦勞なくできることが災害によって大きな困難となってしまふからです。そのような立場の人たちは「災害時要援護者」として位置付けられています。また、世界では緊急時の人道支援の国際基準「スフィア基準」というものがあり、災害時でも一人ひとりが「人間として尊厳のある存在」であることを前提に、特別な配慮が必要な人が位置付けられています。

災害時要援護者

乳幼児、高齢者、外国人、
障害者、妊婦、傷病者、旅行者他

「スフィア基準」の配慮グループ

子ども、ジェンダー（性別）、高齢者
障害者、HIV/AIDS 他

自助・共助がうまくいくことが公助を活用する決め手になります

災害時には、まずは自分自身の命と安全を確保することから始まります。そして、今ここで、一緒に被災した人たちとどのように生き延びるのが問われます。普段の付き合いのある人ばかりではないでしょう。でも、声を掛け合い、ニーズを知り、協力しながら、よりよい「そのとき」を作っていくなくてはなりません。

いろいろな立場の人たちが異なるニーズを持っていることや、特別な支援が必要なことを知っておくことは、お互いによりよく生きていくためにどうしても必要なことなのです。平常時から男女共同参画や多様な視点からの防災・減災の取り組みについて理解を深め、実践することが大切です。



国連防災世界会議



2015年3月に仙台市で開かれた第3回国連防災世界会議には、国のトップリーダーから市民まで、国内外から多くの女性たちが参加しました。会議では災害死亡率や被災者数の大幅減等、2030年までに世界が達成すべき7つの目標もふくめた「仙台防災枠組み（2015-2030）」が採択されました。「枠組み」は女性や多様な人たちを、防災・減災の場でリーダーシップを発揮する人として位置付けています。



パブリック・フォーラムテーマ館
「女性と防災」

